

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
1) 集団の中で切磋琢磨し人格の形成を図る。 2) 個人の尊厳を重んじ、知・徳・体の調和のとれた発達を図る。 3) 地域に根ざした一層豊かな学校文化、「菟道文化」の創造を図る。	○ 生徒の学力、体力、社会適応能力、自己管理能力を総合的に向上させるため、授業、行事、部活動等を通して丁寧かつ粘り強い指導を行った。学校評価アンケートでは本校の教育活動について一定の評価が得られた。 ○ 公開授業等の授業交流を通して教科指導力の向上を図った。主体的・対話的で深い学びや探究型学習等の研究については十分に取組み始めたとは言えず、授業改善に向けた取組は継続する必要がある。 ○ 部活動の加入率が80%を越え、多くの生徒が積極的に活動し、全国大会等へ出場するなど学校全体の活性化にもつながった。一方で学習との両立に悩む生徒や、退部する生徒も見られ、今後も担任・教科担当・部活動顧問が連携し、同じ方向性で丁寧な指導をしていく必要がある。 ○ 特色化事業(国際交流・宇治田楽・論文コンテスト等)については、生徒は真摯に、かつ意欲的に取り組み、年々レベルは上がっている。学年、担当分掌、教科等の連携により、取り組み時間の確保や担当者間での調整が継続して必要である。 ○ 心身に悩みを抱える生徒や特別支援を要する生徒への指導については、地域センター等とも連携し、適切に行うことができた。今後も全教職員が対応できるよう知識と技能の更なるスキルアップを目指す。 ○ ホームページの完全リニューアルをはじめ広報活動については、学校公開・説明会、中学校との連携等、本校の教育活動を積極的に外部に発信し、志願者の増加につなげることができた。本校の魅力発信のために、在籍生徒の教育活動や学校生活の様子をさらに効果的に発信することが課題である。 ○ 3年生の希望進路実現においては、最後まで粘り強く丁寧な指導を続けた。国公立大学を目指し本校へ入学する生徒は多く、その希望の実現のため全校体制で3月まで指導していく組織作りが必要である。 ○ 家庭学習については、質・量ともに減少傾向にあり、早期より学習に対する意識付けを質の高い授業を通して行っていくことが急務である。 ○ 「チーム菟道」については具体的な場面で帰属意識を持たせる指導、また仲間を思いやる心や仲間同士で切磋琢磨することの大切さについて理解させる指導が必要である。	○ 人生100年時代に入り、10年後はもとより生涯にわたって力強く、より良く生きていける人間となるよう、「知」「徳」「体」のバランスがとれた生徒の育成を図る。 ○ 質の高い授業をはじめとする全ての教育活動を通して、組織的で計画性のある、丁寧で粘り強い指導を行い、学力向上と進路希望の実現を目指す。 ○ 「チーム菟道」という言葉に象徴される、他人を思いやる心を持ち、社会や集団内で各自の役割をしっかりと果たし、互いに切磋琢磨する生徒を育む。 ○ 学習と両立できる、はじめある部活動の実践により、生徒の個性伸張と学校の活性化を目指し、高い目標を掲げて挑戦する、チャレンジ精神旺盛な生徒及び集団を育成する。 ○ 指導要領並びに大学入試改革に対応し、主体的・対話的で深い学び、探究型学習及び高大接続システムについての研究とICTを用いた授業についての研究を進める。 ○ 読書活動や話し合いの活動を充実させ、「言葉の力」の育成を図る。 ○ 種々の課題を抱える生徒に対し、手厚い指導を行い、安心して学校生活が送れるような指導体制を整える。 ○ 特色化事業(国際交流・伝統文化事業・グローバルネットワーク校・オリパラ教育推進校等)を効果的に活用し、多様な知識や経験を通して国際社会で活躍できる力の基礎を育む。 ○ 開かれた学校づくりを進め、本校の魅力や特色について情報発信の方法や内容を工夫し地域や中学生の理解と信頼を得る。 ○ 生徒、教職員にとって「楽」ではないが「楽」しい学校を目指す。

※「言葉の力」…情報を正確に理解した上で、相手の表現や意図や背景を推論し、根拠を挙げて自分の意見を述べ、話し合って与えられた課題を解決できる力

評価領域 (分掌領域)	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評 価		成果と課題
			項目	総合	
教務部	・一人一人の希望進路を実現させるため、生徒の学力に応じた質の高い授業が行えるように教科指導力の向上を図る。	・生徒の希望進路を実現させるため、家庭での学習時間を確保させ、学力の定着と向上を図る。年2回の学習時間調査を活用し、昨年度より30分程度の増加を目指す。	C	B	・春と秋の学習時間調査では、各学年ともに目標を下回る結果となった。秋にはスマホの使用時間を項目に加え、相関関係を見たが、想像以上にスマホ依存している生徒が多く、今後の課題の1つである。 ・授業交流では、春と秋ともに参観目標回数2回をほぼ達成できたが、まだまだ活発とは言い切れない状況にある。ただ、ICT活用される先生方は多く、今後更に活発な授業交流を行い、各先生方の授業改善につながる機会としたい。 ・残念ながら「探究型学習」の在り方については具体的に取り組むことができなかった。来年度、令和4年度実施の教育課程とともに検討していきたい。 ・ポスターセッションや英語プレゼンテーションの取組等を通し、「持続可能な国際社会」に向けて生徒の意識向上を図った。年々、発表内容は充実しており2月の交流会でも入賞できるレベルに仕上がっている。また、昨年より減少したが夏の短期留学には4名の生徒が参加した。
	・新学習指導要領や大学入試改革に対応するため、「主体的・対話的で深い学び」、「高大接続システム」及び「ICTを用いた授業」について研究を進める。	・年2回の授業交流（公開授業）を実施し、教科指導力の向上を図る機会を設ける。各自のテーマを設定し研究を進めてもらうとともに、秋期の授業交流では特にICTを用いた授業について研究を進める。	B		
	・本校での「探究型学習」の在り方を検討する。	・部長会議や教科主任会を中心に、「探究型学習」についての研究を始める。令和4年完全実施の新しい教育課程編成を含め、菟道高校としての今後の在り方を考えていく。	C		
	・特色化事業を活用し、国際社会で活躍できる力の基礎を育む。	・特色化事業（グローバルネットワーク京都の取組）を通して、国際理解に対する興味・関心を高め、国際社会で活躍できる力の基礎を育む。	B		
生徒指導部	・自他の生命を大切にす豊かな心を育成し、互いに支えあう生徒集団作りを目指す。	・学期始まりや考査期間の交通安全指導、PTAと連携して実施する年3回の交通安全指導を行うなど、登下校時の生徒の安全を図る。	C	B	・日頃から安全に登下校することを喚起するとともに、PTAと連携して交通安全指導を実施することはできた。しかし、自転車事故件数が21件あり、必ずしも安全指導が行き渡ったとは言えない。また、近隣からの苦情が多く、ルールだけでなくマナーの周知も必要である。 ・自然に挨拶ができる生徒が増えてきた。 ・普段の観察や定期考査時のチェックなどを利用し、頭髪・身だしなみに係る指導を担任と連携しながら実施した。大きな乱れはなく、概ね落ち着いた学習環境を維持できている。 生徒アンケートの「授業中は落ち着いて勉強できる雰囲気がある」の項目の肯定的な意見も81%であった。また、携帯電話等に係る指導は53件と昨年度の70件より減少した。SNSに係る大きな問題も発生していない。 ・菟道祭をはじめとする学校行事では生徒会を中心に生徒が主体的に活動し、落ち着いた雰囲気のもと実施することができた。今年度はプログラムの簡易化や1年生の横断幕をポスターに変更するなど例年通りではなく工夫を加えて実施することができた。さらに学年部との協力を密にして組織的な指導体制を確立したい。なお、生徒アンケートの「学校行事は適切な内容で充実している」の項目の肯定的な意見は70.7%であった。さらなる充実を図りたい。 ・部活動の部長会議では、副部長、マネージャーも参加させることで幹部の結束を高め、さらなる自治活動を促したが、あいさつを徹底することや活動場所の清掃や整理整頓などに課題がある。
	・基本的生活習慣を確立させるとともに規範意識を高める。	・学年部や各教科と連携し、安心して学習できる環境作りを組織的に行う。また、いじめのない生徒集団の形成を目指す。			
	・学校行事、生徒会活動、部活動、ボランティア活動等に積極的に参加させることで菟道高校生であることの自覚と責任を高める。	・学年部、他分掌、各教科と連携をとり、組織的に制服・頭髪・化粧など、身だしなみの指導を行う。 ・生徒会、風紀委員会等を通して、ルールやマナーを周知させ、生徒自らルールを守る意識を高めさせる。携帯電話等に係る指導については、年間50件以下を目標とする。 ・生徒アンケートの「授業中は落ち着いて勉強できる雰囲気がある」とする項目の肯定的な回答が80%以上となることを目指す。 ・学年、教科等と連携してSNSに係る諸問題を生徒に理解させるとともにSNSを適切に利用するよう指導する。	B		
		・学校行事、生徒会活動、ボランティア活動、主権者教育などを通して、周囲と協力して課題を達成する生徒の育成を図る。 ・生徒アンケートの「学校行事は活性化している」とする項目の肯定的な回答70%以上、「ホームルーム活動や生徒会活動は充実している」とする項目の肯定的な回答60%以上となることを目指す。 ・学期に1回部活動の部長会議を開き、部長に対して部活動だけでなく、菟道高校の代表者としての責任と自覚を持たせる。	B		

進路指導部	・学年団・各分掌・教科と協力して、生徒の希望進路の実現に向けて組織的にサポートするとともに、人生における自己実現力、幅広い人間性を身につける。	・90%以上が4年制大学進学を希望している現状を共通認識として、進路LHR・模擬試験・夏期免活・冬期免活・二次指導などの進路行事を効果的に実施できるよう企画・運営する。その際、他分掌・各教科と連携しながら、生徒達にとってより効果の高い進路行事を実施する。 ・入試動向・模擬試験の分析・各種進路研修会の案内を通じて、教員の進路指導の研修の機会を提供し、指導力の向上を図る。 ・新入試・新学習指導要領に向けての準備を進める。新調査書についてはポートフォリオの活用の方針について研究し、2020年度の入試に対応できるよう準備する。また、大学入学共通テストに向け、プレテストなどを活用するとともに、研修会などの情報を提供し、各教科の指導がスムーズに行えるようにする。 ・自身の生き方や在り方を考えさせる「キャリア教育」、幅広い人間性や人権意識を育てる「人権教育」を、各学年の適切な時期に計画的に実施し、自己実現能力と幅広い人間性を育む。	B ----- B ----- B ----- B	B	・進路実現に向けた進路行事を効果的に実施できた。さらに効果を高めるため、他分掌や各教科からの反省を次年度に生かしたい。 ・入試動向や大学関係の説明会の案内だけでなく、スタディーサポートや模擬試験の分析会、小論文研修会など教員研修の場を多く提供できた。研修がやや多いため、来年度は優先順位の高いものに精選する必要がある。 ・外部検定試験や共通テストの変更を踏まえ、進路実現に向けて、次年度も引き続き対応していきたい。特に、学力を高めることが最も重要であり、3年間を通して学力を高める取り組みを増やしていく。 ・「キャリア教育講演会」や「人権学習」を通して、人間性と人権意識を高めることができた。「キャリアパスポート」や「ポートフォリオ」の活用を考え、さらに効果の高い指導ができるよう改善する。
図書部	・教科や他分掌との連携、委員会活動の活発化、また図書館刊行物の発行により読書指導を進める中で、図書館の積極的利用を勧め、貸出冊数の増加を図る。	・教職員推薦図書を紹介冊子「菟道の泉」を年1回、図書館だより「あじろぎ」を月1回発行し、読書をすることの意義や楽しさを発信し、「言葉の力」の育成を図る。また、教科や分掌と連携して積極的に読書指導をすすめる。 ・図書委員会の活動を活発に行い、「ライブラリーニュース」の発行を通じて読書の啓発を行う。文化祭やブックフェアなどのイベントを通して図書館に足を運び、本に親しむ機会を提供する。 ・ベストリーダー証発行（累計20冊以上貸出し）が85人以上（昨年度82名）となるよう、読書指導をすすめる。また、エクセレントリーダー（累計200冊以上貸出し）を出すよう努める。 ・授業や行事がさらに充実するように視聴覚機器の整備と刷新・充実を図る。	B ----- B ----- B ----- B	B	・読書活動の推進に向け、「菟道の泉」「あじろぎ」「ライブラリーニュース」の発行し、イベント等を行った。 ・図書委員会はイベント等の企画・実施の中心となり活発に活動を行った。図書館からの告知を校内随所で行い、読書活動の啓発を行った。 ・今年度はエクセレントリーダー84名となり、昨年より増加した。 ・視聴覚室の整理を行い、必要な物の見直しを行った。漸次充実を図っていきたい。
保健部	・自己の健康管理に努め、心身ともに健康で安全に生き抜くたくましい身体と豊かな心を養う。 ・環境に対する関心を高め学校環境の美化保全のために主体的に実践できる態度の育成を図る。	・教育相談をこまめに行える環境を整え、情報交換を密に行い必要に応じ関係機関と迅速・丁寧に連携を取り、心身に課題を抱える生徒が安心して学校生活を送れる支援体制の確立を目指す。 ・全教職員がユニバーサルデザインの視点に立った教育活動を行えるよう、研修会や「教育相談だより」を通して年3回以上の情報発信を行う。 ・委員会活動を前・後期計6回以上行い、生徒が身近な健康問題や環境問題について考え、主体的に立案・運営できる取り組みを行う。 ・校内のゴミの分別に対する意識を高め、啓発活動等を行いゴミの減量化を図る。	A ----- B ----- B ----- B	B	・増加傾向にある心身に課題を抱える生徒について学年部や教科担当者と迅速に情報交換を行い即時対応に生かす努力をした。関係機関との連携も10回行った。 ・ユニバーサルデザインに関する研修、発達障害に関わる指導の工夫やHSC (Highly Sensitive Child)に関する情報発信、色覚検査や発達検査の結果を踏まえて情報共有の機会を設けた。 ・委員会活動は、菟道祭で歯・口の病気の予防の啓発活動、インフルエンザの流行期に換気・手洗いの励行を促す活動を行った。また通常清掃では行えない箇所の清掃も補えた。 ・新設トイレの清掃方法について随時改善している。教室内でのゴミの分別については課題が多く分別表記のユニバーサルデザイン化を検討している。

総務企画部	・中学校や地域社会に対して、学校への理解と信頼を深めるために広報活動全般の推進を図る。	・学校説明会、学校公開、部活動体験をはじめ、中学校訪問や塾の説明会、さらにUJI学などの運営・調整を通して、中学生や保護者、地域の人たちが本校への理解を深められる取り組みをする。 ・学校説明会・学校公開等の年間参加者が1200人を越える広報活動を行い、説明会参加者アンケートの満足度95%以上を目指す。 ・学校案内、ポスター、ホームページ（HP）、PTAメール（まちこみメール）等の広報媒体の作成、管理、更新を行い、広報活動全般の推進を図る。 ・学校案内の冊子やHPの内容の充実、学校説明会の広報用ポスター、中学校別のポスターの作成、公式HPを週1回以上更新、PTAメールを週1回以上配信する。	B		・部活動体験、学校公開、2回の学校説明会、個別相談会を合わせた参加者は1404名と目標を越えたが、満足度はおよそ90%であった。中学生や保護者に本校の魅力をアピールする機会になった。 ・学校案内やポスター、ホームページの作成・更新を活発に行い、本校の取り組みを広報した。特に、中学校別ポスターは好評であった。 ・PTA活動にも連携して取り組んだ。週1回のメール配信も行った。
第1学年部	・基本的生活習慣を身につけさせ、集団生活による規範意識の育成を図る。 ・進路希望の実現に向けて、学習習慣を確立させて基礎力の充実を図る。	・初期指導期間に校則遵守の指導、高校生としての生活規則や授業規律を徹底させる。 ・授業を中心として予習、復習の学習スタイルを定着させ、学習と部活動の両立を実現させる。 ・進路学習を通して自己の進路に興味・関心をもたせ、3年間を見通した学習計画を立てさせる。	A	B	- 概ね校則を遵守した高校生活を送り、学校行事や学年集会での集合状態や参加の姿勢なども積極的に規律ある行動ができた。 ・課題の取り組み状況等は概ね良好であるが、総じて学習時間は決して多いとはいえない状況である。スマートフォンに費やしている時間が多い生徒が見られるので、手帳やポートフォリオの活用を通じて、時間管理と主体的に学習していく姿勢を身につけていく必要があると感じる。 ・コース・科目選択や保護者面談を通じて、自己の将来の目標進路を考えるきっかけにすることが出来た。冬期課外授業で理系コース・文系コースに分かれて講座を編成して授業を展開することで、目標進路への意識を一層高められたと感じる。また、外部で模擬試験を受けようという積極的な動きも見られてきた。
第2学年部	・自己理解を深化させるとともに、集団生活における自己のあり方を考えさせる。 ・進路希望の実現に向けて、基礎学力の定着と主体的に学びに向かう姿勢を育成する。	・個に応じたきめ細かい指導を心がけ、高校生として望ましい規範意識、生活習慣を身に付けさせる。 ・授業を中心とした学習スタイルを定着させ、部活動との両立を実現させる。 ・進路学習や手帳活用、ポートフォリオ作成を通じてPDCAサイクルを確立させ、家庭での学習計画、2年後を見据えた進路計画を立てさせる。	B	B	・多くの生徒は授業や部活動に積極的に取り組み、規律ある学校生活を送ることができた。 ・各分掌と連携を密にし、学習面・健康面・生活面等で課題を抱える生徒やその保護者に対して適切に対応することができた。 ・手帳やポートフォリオノートを活用することで、自己管理能力を向上させるとともに主体的に学習に向かう姿勢を育成することができた。
第3学年部	・多様化・複雑化する社会に適応し、将来を切り開くために学校生活を通して自ら判断し、行動できる集団を育成する ・進路希望実現のため、最後まで粘り、やり遂げる学習集団を育成し、国公立大学合格者数50名以上を目指す。	・スマホ・携帯電話に関する指導（SNSを含む）、服装・挨拶・遅刻指導、また交通安全指導などの生活指導を充実させ、高校生という立場だけでなく、社会人として責任ある行動ができるよう指導する。 ・面談を通じて自分自身と向き合わせる機会を持たせ、自らの課題を解決するための過程を模索させる。 ・進路指導部と連携し、進路行事を充実させることで生徒の進路研究を深化させる。 ・学習の核である授業に積極的に参加させると共に、土曜莞活や課外授業、自習室などを活用させて、生徒一人ひとりの学習活動を充実させる。	B	B	・生徒は、比較的落ち着いた学校生活を送り、莞道祭など、学校行事で互いに協力し、団結力を高めた。一方、遅刻等、高校生としての基本的な生活がきちんと出来ず、指導を継続して行わなければならない生徒がいた。 ・3学期に入ると体調不良者が多い状態が続き、学年末考査を欠席する生徒が目立った。 ・多くの生徒が、土曜莞活の自習や講習、また放課後の自習室を活用し、進路実現に向けて前向きに学習を行った。 ・様々な困難を抱える生徒がいたが、他分掌・教科と連携し、個々に応じた指導を継続した。

事務部	・予算計画に基づく効率的かつ効果的な予算執行	・当初予算の削減（学校運営費・旅費）を受け、本校の学校経営方針や経営目標を達成するために、教育内容を理解し、より効率的効果的な予算執行を行うため各部・各教科へのヒアリングを十分行う。 ・スマートスクール推進事業をはじめ、本校の教育内容に沿う府の事業等を積極的に活用、推進する。	B	B	・府の「新陳代謝プログラム」による学校運営費・旅費の当初予算の削減の中、教職員の理解・協力を得ながら、効率的・効果的な予算執行に取り組めた。 ・スマートスクール事業の施設・設備の整備に、教員と連携して取組めた。 ・就学支援金や予約奨学金制度は、制度の変更点も多かったが、生徒や保護者が特に混乱することもなく実施できた。 ・老朽化した施設設備が多く、緊急対応的な修繕に終始し、計画的な修繕ができなかった。
	・生徒の修学支援制度の適切な就学支援金制度	・就学支援金や奨学のための給付金等の事務において、制度や手続きの説明や運用を適切に行い、教員と連携して、生徒・保護者からの信頼に応える。 ・生徒の進路希望の実現を見据え、各種奨学金制度の周知を図る。また、昨年度に引き続き、3年生を対象に日本学生支援機構による予約奨学金制度の説明会を開催する。	A		
	・安全な施設・設備の管理	・定期的な校内巡視を行い、施設設備点検を実施し、不良箇所等の早期発見に努める。老朽化した箇所については、計画的に修理し、学習環境の充実を進める。 ・工事や修繕の実施は、校内調整を十分に図り、生徒・教職員が安全に学校生活が送れるように努める。	B		
	・効率的な文書事務の徹底	・文書を適切に起案し、決裁・施行・廃棄等の取扱いを文書取扱主任を中心に、事務部及び各分掌等へも指導し徹底する。 ・個人情報の管理を適切に行う。	B		
	・学校経営に参画する事務職員の育成	・開かれた学校づくりを進め、本校の魅力や特色について情報発信の方法や内容を工夫し地域や中学生の理解と信頼を得るため、学校説明会及び学校公開において、正確な会計事務はもとより、準備から当日の運営までの実施を教員と連携し積極的に参画する。 ・学校行事等へも積極的に参加し、学校全体の業務や事業について俯瞰し、業務に活かせる事務職員を育成する。	C		

平成31年度 府立菟道高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン） 教科領域

評価領域 (教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		進捗状況（成果と課題）
			項目	総合	
国語科	・語の意味や文章の構造、言葉の働きや役割に対する理解に基づいた、確かな読解力を身に付けさせる。	・単語や文法事項の定着のため、小テストや課題を継続的に課していくとともに、文章構造を意識した読解をさせていく。	A	B	基礎基本の定着及び読解力向上のための日々の取り組みは、充実している。 ICTを活用した授業については、先行して取り組んでいる者を中心に、全員が効果的に活用できるよう情報交換してゆく必要がある。 小論文やポスターセッションにおいて、国語科として「言語」の分野から生徒の主体的な知を伸ばしていけるよう、更に工夫が求められる。また、読書離れが進む中、図書館を授業の中で積極的な活用を考えたい。
	・新学習指導要領並びに大学入試改革に対応可能な、主体的・対話的で深い学びの授業が行えるよう研究を進める。	・ICTを活用し、学習した内容を補足する資料や、異なる複数の意見に触れさせたうえで、自らの考えを形成し深めさせる授業ができるよう、方法を研究する。	B		
	・読書活動や話し合いの活動を充実させ、「言葉の力」の育成を図る。	・図書室・情報処理室も活用しながら、グローバルネットワーク事業との関連の中で、小論文・ポスターセッションを通し、読書や話し合いの活動を充実させる。また、授業においても読書や話し合いの活動を積極的に取り入れる。	B		

地歴・公民	・ 個々の希望進路の実現と新入試や多様な入試に対応できるよう、質の高い授業を展開することを目指し組織的に取り組む。	・ 小教科の担当者同士の打ち合わせや意見交換を密にし、生徒の現状や課題などの把握に努め、適切な授業の展開に取り組む。	B	B	・ 小教科内で考査前などに授業内容や生徒の課題や現状把握について意見交換等を行い、授業改善に務めた。 ・ ICTを活用した授業に取り組み、生徒の興味・関心に繋がる授業を実施できた。しかし、全ての授業での活用には至らなかったため、今後に向けて更なる研修が必用である。 ・ 小教科で、小テストの実施やレポートを課し、基礎学力の定着を図った。
	・ 基礎・基本的な知識の定着を図り、積極的に学ぶ姿勢を身に付けさせ、教科に対し興味・関心を持たせる。	・ 授業力向上のため、研究授業や授業公開を積極的に活用するとともに、新入試、ICT活用に向けた研修に努める。 ・ 計画的に定期試験や小テストを実施するとともに、課題やレポートを課すことで、学習習慣や基礎学力の定着を図る。	B		
			A		
数学科	3年間を見通した学習指導を行い、希望進路の実現につながる学力を一人一人につける。	・ より質の高い授業をするよう努めるとともに、実力を育成するための十分な演習時間と質を確保する。 ・ 家庭学習の意識を高めるため、各時の課題を明らかにし、明確な目標を持って学習に取り組み、自ら学力を伸ばす生徒を育てる。 ・ ICTを有効に活用する授業について研究する。 ・ 新テストに対応した問題の研究をすすめる。	A	B	授業の中で、学習時間と質の確保に努めた。 共通課題だけでなく、各担当講座に対応した課題を提示し学力を伸ばす工夫をした。 ICTを活用した授業を数多く行い、指導法を試行錯誤した。 新テストに向けて情報収集しているが、研究まで進んでいない。
			B		
			A		
			B		
理科	・ 自然科学に対する生徒の興味・関心・意欲を高める。	・ 基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的なものの見方や考え方を身に付けさせる。授業に演示実験やプロジェクター、電子黒板などの視聴覚教材を多く取り入れる。 ・ 実験・実習を年間3回以上実施し、レポートの作成方法を指導して全員に提出させる。また高大連携事業などにおけるプレゼンテーションなどを通して、能動的に学ぶ姿勢を養う。	A	B	・ 授業に電子黒板などの視聴覚教材を積極的に取り入れ、生徒の理解を深めるためにパワーポイントの内容にも工夫が見られた。 ・ 問題演習ノートの提出を定期考査前に課し、授業内容の定着を図ることができた。 ・ 実験や実習については、ほぼ年度当初の予定通りに実施し、レポートの作成の仕方についても指導し、提出させた。 ・ 高大連携事業を通して生徒の興味、関心を引き出し、能動的に学ぶ姿勢を高めさせることができた。
			A		
	・ 進路選択に対応できる学力を育成する。	・ 授業の順序や内容を適切に組み立て、効果的な指導を行う。学習内容の定着のため可能な限り問題演習をさせ、演習ノートを年間5回程度提出させる。 ・ 小テストや課題テスト等を適宜実施し、基本事項の定着を図る。授業と家庭学習の関連付けを明確にし、学力補充や進学補習にも積極的に取り組ませ、進路実現のために必要な学力を身に付けさせる。	B		
			B		
保健体育科	・ 運動実践や体育理論を通じて、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、運動することの意義を理解させる。 ・ 自己に応じた体力の向上を図り、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する能力を付けさせる。	・ 限られた運動施設・設備の中で、可能な限り生徒の興味関心のある運動を選択させ意欲的に取り組むようにさせる。 ・ 選択制授業を通じて、自ら計画を立案し、運動やスポーツに取り組むことができる基盤を作り上げる。 ・ 体育理論での講義を通して、運動やスポーツに対する文化や身体の構造を理解させる。 ・ 事故や怪我がないよう、用具の使用法や安全に留意させる。	B	B	・ 生徒の興味関心ある種目は、一部の講座を除いてほぼ希望する種目を選択できた。 ・ 選択制授業の授業計画案が不十分で来年度以降の課題と言える。 ・ オリンピックを控え概要に触れることにより生徒の興味関心は高まった。 ・ 興味あるテーマについて調べて発表をすることで、プレゼンテーション能力が進展した。
			B		
			B		
	・ 健康や安全について理解を深め、生涯を通じて自らの健康を管理し改善していく能力を付けさせる。	・ 健康を管理し、改善していくための、情報を提供する「発表」とその情報をまとめる「収録作り」を実践させる。	B		

芸術科	・基礎的・基本的な技術の定着を図り、意欲的に活動する姿勢を育成する。更に、定着した技術を基に独自に応用する能力を身に付けさせる。 ・それらの活動を通じて、自国・他国の文化芸術を尊重する人材を育てる。 ・豊かな創造力を下に、主体的に考え自ら問題提起し解決に向けて行動できる能力を育てる。	・意欲や創造性を引き出せる指導法の研究と教材の精選をすすめ、生徒の創造力を向上させる授業を行う。	B	B	・指導法の研究や教材の精選のため研修や学会等に積極的に参加できた。生徒が自ら疑問を持ち探求する授業を実施した。 ・2月の芸術祭に向けて、より良い合唱や演奏、作品制作が発表できるよう指導した。
		・芸術祭を中心に発表させることにより、自己の作品・演奏に責任を持たせるとともに、鑑賞指導の充実を図る。	B		
英語科	・家庭での学習習慣を身に付けさせ、基礎学力の定着を図る。さらに、それぞれの進路希望に対応できる実践力を養う。 ・英語学習への意欲関心を高め、自主的・主体的に学習に取り組む姿勢を身に付けさせる。 ・知識・技能の習得にとどまらず、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、思考力・判断力・表現力を養う。	・学習のねらいを理解させた上で、小テストや各種テスト、課題を計画的に設定し、学習習慣と基礎学力の定着を図る。	B	B	・小テストや課題を計画的に設定することで、学習習慣を促し、基礎学力の定着に一定の効果があつた。 ・外部試験や模試を利用し、様々な言語活動を授業内に取り入れることができた。言語活動に対する評価方法には工夫の必要があり、今後の課題である。 ・外国人指導助手との意思疎通を図り、生徒のコミュニケーションを促す授業が展開できた。 ・ICTを授業に効果的に取り入れつつあるが、教科内でさらに共有する必要がある。
		・G-TECや英検、各種模擬試験を通して、定期的に英語運用能力を確認するとともに、課題克服に向けた取組を積極的に授業に取り入れる。	B		
		・また、大学入試の外部試験導入に対応できる力を養う。	B		
		・生徒の興味・関心・能力に応じた教材を選択し、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成する言語活動を授業に取り入れる。	B		
		・外国人指導助手との意思疎通を十分に図り、積極的なコミュニケーション活動を促す。 ・授業の中にICTを効果的に取り入れる。	B		
家庭科	・実践的・体験的な学習を通して、主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成する。 ・家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見だし、課題を設定し、解決する力を養う。 ・基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、学んだ事を活用できる力を身に付けさせる。	・少子高齢化、食育、成年年齢の引下げ等社会の変化への対応を一層重視する。特に、子どもに対する理解、子どもと関わるコミュニケーション能力の育成を図るために、保育園実習、グループディスカッション等の学習を積極的に取り入れる。	B	B	・実践的・体験的な学習を通して、家庭生活における様々な課題について検討し、生活に関わる知識と技能を習得することができた。 ・保育園実習、妊婦体験等の子育て学習により、生徒の乳幼児に対する意識が大きく変化した。 ・次年度はICTを授業に取り入れ、学習活動の活性化を目指す。 ・社会人講師による講演により、成年年齢引下げや責任ある消費についての知識を身に付けることができた。
		・外部講師による講演を通して、我々を取り巻く社会状況を把握し、自らの生活課題の解決方法を探求し、問題を解決する力を育てる。	B		
		・体験学習ごとにレポート提出を課すことにより、学んだこと感じたことを自分の言葉で表現する力を養う。	B		
情報科	・受信した情報を正確に理解する能力の育成及び、情報発信者の意図を読み取る能力を育成し、自分の考えが正確に発信する能力を育成する。	・時代の流れに応じた授業内容となるよう、時事の話題を随時授業に取り入れ、メディアリテラシーや情報モラル・マナーを普段の生活で実践できる力を身に付けさせる。	B	B	・座学においては、情報モラルやメディアリテラシー、SNSの危険性など時事の話題を取り入れる授業を行った。
		・情報を主体的に捉え、随時抜えるようにするため、実践的な実習課題を年間通して3テーマ以上、総授業時数の2分の1を実習に割り当てる。	B		

学 校 関 係 者 評 価 委 員 会 に よ る 評 価	・ 学校が落ち着いている点が良い。菟道高校らしい感じを継続してほしい。 ・ 生徒が積極的に参加したいと思う楽しい行事をお願いしたい。 ・ もっと保護者を巻き込んで距離を縮める工夫を願いたい。 ・ I C T 活用の一つとして、スマートフォンを学習活動に取り入れてはどうか。 ・ 菟道高校での成功体験や失敗談も含め、先輩の話を聞く機会をもっと多くしてはどうか。 ・ 10年後を見据えた教育活動をアピールしてほしい。 ・ webを活用した情報発信を積極的に行ってほしい。 ・ 生徒がホームページ作成に参加するようにしてはどうか。 ・ 自転車通学生徒のヘルメット着用を推進するために、生徒がヘルメットを自由に選べるようにしてはどうか。
次 年 度 に 向 け た 改 善 の 方 向 性	・ 本校の校訓である「さとく」「さやかに」「たくましく」を全ての教育活動の中に具現化するため、より質の高い授業を実践し、部活動をはじめ特別活動の充実を図る。 ・ スマートスクール推進事業の成果と課題を踏まえ、ユニバーサル・デザインの観点に立った I C T 教育を推進していく。 ・ 校内組織を有機的に連携させ、全教職員が最大限の教育効果を上げる意識を常に持ち、職務を協働的に取組む。 ・ 広報活動において、卒業生や在校生が直接中学生や保護者に語る機会を設け、菟道高校生の良さをアピールし生徒募集につなげる。 ・ 自転車交通安全や携帯・スマートフォンの利活用などについて、時機を逃さず継続的に指導を行っていく。 ・ 特色化事業で得た知見を基に「探究的な学習の時間」の活動内容を具体的に計画し、円滑に取り組むことができるよう図る。 ・ 校内の施設設備について、可能な範囲で更新をして学習環境を整える。